

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和元年6月20日現在

機関番号：34310

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15H03145

研究課題名(和文) ケアの倫理の民主主義的展開ーフランスにおけるケアの倫理受容研究を通じて

研究課題名(英文) Democratic Development of the care ethics: Through the study of French Feminists' Understanding of the care ethics

研究代表者

岡野 八代 (Okano, Yayo)

同志社大学・グローバル・スタディーズ研究科・教授

研究者番号：70319482

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 9,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的の一つは、国際的なフェミニズム研究の拠点を、同志社大学に創設することであった。フランスのフェミニスト研究者との共同研究だけでなく、様々な地域の研究者や女性活動家たちとの交流拠点として、フェミニスト・ジェンダー・セクシュアリティ研究センターを、2015年より運営できるようになった。また、本研究課題を通じて、フランスを中心にヨーロッパ、そして合衆国のケア研究者との国際的な研究交流を築いた。理論的には、ケアの倫理を民主理論として鍛えるとともに、ケアを重視する民主主義が、ネオ・リベラリズムへの対抗理論として応用できることに確信を得た。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ケアの倫理はこれまで、母子関係を中心とした狭い対人関係にふさわしい倫理だとされてきたが、むしろ、民主主義やさらには、国際関係や安全保障に関しても、市民の日々の生活に根付いた知見を提供してくれることを、ケアの倫理の源流である第二波フェミニズム理論におけるマルクス主義との対決を読み返すことで明らかにした。また、紛争が絶えない現代世界においても、傷つきやすい存在、他者とのケア関係のなかでこそ自尊心を養えるとするケアの倫理は、市民の政治的関心を高めるためにも、重要な倫理であることを見出した。

研究成果の概要(英文)：One of the purposes of this research was to establish the center for feminist studies in Doshisha University. I started to organize the Center for Feminist Gender Sexuality Studies as the center for the collaborative research not only with French scholars but also scholars and activists from many other regions. I also established the international research network on care ethics with European scholars and North-American scholars. Theoretically I elaborated the care ethics as a democratic theory and I can find that a democratic theory centered on the ethics of care can be applicable to the counter-theory to the neo-liberalism.

研究分野：フェミニズム理論

キーワード：ケアの倫理 民主主義 フランス

1. 研究開始当初の背景

合衆国の発達心理学者キャロル・ギリガン『もうひとつの声』(1982)を嚆矢とするケアの倫理は、母子関係という対面的で非対称の具体的関係性のなかでの他者ニーズに対する応答のあり方に着目することから発展してきたために、公的領域ではなくむしろ、私的な領域にこそ相応しい倫理であると久しく理解されてきた。また、公的空間では傷つきやすい存在を、親密圏において配慮するのは歴史的には女性の役割であったため、ケアの倫理を称揚することは「女らしさ」を再強化し、女性を私的領域に留め置くことに帰結するとして、80年代にはフェミニズム研究内部で多くの批判に晒されてきた。さらに、政治哲学との関連では、ギリガンが正義の倫理と対照させつつケアの倫理を定義したため、正義論(=公的原理)「対」ケアの倫理(=私的な倫理)という二項対立の関係で論じられる傾向にあり、現在でもその傾向は続いている。他方2000年代に入ると、ケアの倫理には、時空間によって適用範囲が限定されてきた正義の射程を広げる可能性があり[ex. V.Held, *The Ethics of Care: Personal, Political and Global* (Oxford U.P. 2006)]、とりわけ国家暴力の被害者となった者たちの救済と賠償を目指した修復的正義との親和性があるとして、トラウマ研究や国家暴力の被害・内戦の記憶をめぐる研究を通じて、むしろ既存の正義論では応答し得なかった関係性の修復のための実践的な倫理として、多くのフェミニストたちがケアの倫理に着目するようになった[ex. M. Minow (ed.), *Breaking the Cycle of Hatred* (Princeton U.P., 2002), F. Robinson, *The Ethics of Care: A Feminist Approach to Human Security* (Temple U.P., 2011)]。

2. 研究の目的

本研究は、(1) 理論研究と(2) ケアの倫理研究拠点の確立という二つの目的に大別される。

(1) 理論研究については、C. ギリガン、J. トロントの議論を援用しながら政治理論・民主主義論として展開しているフランスにおける研究の意義と、マルクス主義とフェミニズム理論との関係を明らかにし、フェミニズムにおける公私二元論批判を、現代的なマルクス主義フェミニスト理論として再生させる。レイシズム研究とジェンダー研究との接点をマルクス主義フェミニズム探り、「差別」を成立させるカテゴリーの形成過程を社会学的分析に依拠しながら明らかにし、レイシズム研究で示される共生の倫理を発展させ、民主主義の原理、つまり、差別に抗する政治参加の原理に結びつける。最終的に、フランスにおける「連帯」の伝統と、新たに登場したケアの倫理フェミニズムとの接点と齟齬を分析し、新しい共生の倫理としてケアの倫理を構想する。

(2) 研究拠点作りについては、同志社大学大学院グローバル・スタディーズ研究科の資源を活用しながら、すでに大学間協定を結んでいるフランス高等社会科学研究院、ゴノンを通じて共同研究が進んでいるパリ第一大学、研究分担者の菊池を中心にパリ第八大学との共同研究を開始し、研究者間交流のセンターとなるケアの倫理研究拠点を同志社大学内に確立する。共同研究については、フランスで日本におけるケアの倫理研究の現代的な実践的・思想的意義を発信する国際シンポジウムを開催する。また、2017年度に同志社大学にてケアの倫理に関する公開国際シンポジウムを開催し、最終年度である2018年にシンポジウムの報告を含め、研究成果を日本語・フランス語にて公開する

3. 研究の方法

本研究は、(1) 理論研究と、(2) 日仏フェミニストの合同ワークショップによって遂行される。

(1) フェミニズム研究における「ケアの倫理」「社会連帯」「資本主義批判」「植民地批判」「反・人種主義」をめぐる日米仏の文献収集を行いながら、専門家を招き、テーマに即した研究会を関西一円の研究者・大学院生に呼びかけ定期的で開催していく。研究成果は、2) の目標である国際シンポジウムの結果と共に、学術雑誌等において報告する。

(2) パリ第一大学、第八大学、フランス高等社会研究所におけるフェミニスト研究者たちとの合同ワークショップを通じて、ケアの倫理の批判力の所在、その実践的意義をめぐる議論を積み重ねつつ、ケアの倫理に関する国際シンポジウムを開催する。日仏研究者間交流センターとなる「ケアの倫理研究拠点」を、同志社大学大学院グローバル・スタディーズ研究科内に確立する。

4. 研究成果

(1) 理論研究における研究成果

フランスにおけるケアの倫理の受容状況

代表者が2016年11月から2017年9月まで、パリ第8大学にて在外研究を行い、フランスに

おける「ケアの倫理」受容に尽力した、社会学者 Patricia Papelman 教授との共同研究、またパペルマン教授に対して、受容にいたった経緯をめぐるインタビューを行なうことができた。その結果、フランス・フェミニズムにおける根強い共和主義、普遍主義と、その反照的效果としての個別主義への懐疑とがあいまって、ギリガン『もうひとつの声』の翻訳当初(1992年)は、ギリガンはフェミニストなにかといった声を含めた批判が、フェミニストたちの間に起こり、多くのフェミニストたちはギリガンに言及することさえしなかった。しかし、フランスでは、ギリガンに影響を受けた、政治思想家の Joan Tronto らの、民主主義的なケアの倫理の応用が先行して積極的に紹介されることによって、政治的にギリガンを読み返すという潮流を生む。フランスでは、2009年にパペルマン教授と、共同研究者である哲学者の Sandra Laugier 教授らがギリガンをフランスに招聘し、シンポジウムを開催するに至り、ようやくギリガン理解も深まった。また、民主主義的にケアの倫理を最受容する傾向の強いフランス研究者との交流によって、ギリガン自身もまた、それ以前から存在した、ケアの倫理と抵抗の論理をつなげる形で、民主主義論としてのケアの倫理へとその後傾斜いったのではないか、という仮説を、本研究の成果として見いだした。

ケアの倫理と民主主義理論

すでに、ケアの倫理が新自由主義的なグローバル市場の席捲のなかでいかに民主主義を構想するかにとって重要な知見を提供することは、J. Tronto, *Caring Democracy* (2013)において指摘されてきた。本研究では、さらにギリガンが提唱する人間観・世界観の転換から、以下の四点を指摘することで、ケアの倫理が民主的な政治への変革的な理論であることを明らかにした。第一に、ケア実践が人間世界にとって不可欠であること。その認識が、既存の哲学における自律的・独立した個人という理解の偏狭さを明らかにした。第二に、ケアの倫理が明らかにしたのは、人間が身体的な存在であるからこそ、個別性と文脈を重視しなければ他者のニーズに応えられないこと。そして、政治はだからこそ、多元的で民主的な社会構造を必要としている。第三に、具体的な人間の寄り添う政治は、限界ある生と相互依存性をどのように政治制度へとつなげていくかをわたしたちの課題であるとする。第四に、外在的な意味だけでなく、わたしたちが社会的に構成されている、身体と心理をもつという点から、人間はつねにすでに社会的な存在である。以上から、ケアの倫理は、对人的な狭い人間関係のみに相応しい倫理ではなく、むしろ、人びとの善き生き方に必要なケアが、よりよく満たされるための関係性を築き、維持するための社会構造を構想する導きとなることが明らかとなった。

ケアの倫理と暴力・紛争

本研究、とりわけ紛争時・戦時における女性に対する暴力を考えるうえで、すでに80年代より、多くのフェミニスト国際関係論者が、ケアの倫理に着目していたことが明らかとなった。とりわけ、安全保障の分野は、国際関係論のなかでも最も専門性が高く(=男性中心主義的であり)、戦時における個別具体的な被害は、むしろ副次的被害として、研究対象にならなかったことを、ケアの倫理から鋭く批判されてきた。本研究を通じて、批判的安全保障研究とフェミニズム研究との親和性を明らかにし、また、そのさい、ギリガン初め、Sara Ruddick らの研究が多くの影響を与えていることが明らかになった。また、本共同研究において注目された、日本軍「慰安婦」問題の解決に向けても、Margaret Walker を初めとした倫理学者たちが、集団的暴力の被害者たちは、暴力を受ける以前より道徳的な平等性を認められてこなかったゆえに、被害者となる傾向性を指摘してきた。すなわち、国家暴力の賠償には、単なる修復的正義を超えて、加害者と被害者のあいだの平等を確立するような形の変革的な正義を必要とされるのである。そうした議論をうけ、本研究では、日本という加害国にまず必要なことは、被害を訴える女性たちを、自分たちと平等な、敬意に値する声をもった、道徳的に平等な人格として認めることであると主張した。

(2) 国際的共同研究としての成果

同志社フェミニスト・ジェンダー・セクシュアリティ研究センターの設立

本研究の目的である、ケアの倫理研究の拠点として、同志社 FGSS センターを設立し、研究期間後も引き続き、同志社大学の教員を中心に活動を続けている。とくに、本センターは、本研究課題による国際シンポジウム、ワークショップの受け皿になるだけでなく、若手研究者との交流・養成を目的とした講座を提供する場となった。その成果の一つは、毎年開催されている、同志社外の学生にも開かれた、夏期講座の開催である。[see <http://drc-fgss.com/2018/06/19/2018%E5%B9%B4%E3%80%80%E5%A4%8F%E6%9C%9F%E8%AC%9B%E5%BA%A7%E3%81%AE%E3%81%8A%E7%9F%A5%E3%82%89%E3%81%9B/>]

パリ第8大学での共同シンポジウムの開催

2017年3月13日には、研究代表者岡野八代が滞在するパリ第8大学における「ジェンダー・セクシュアリティ・研究センター」(LEGS)において、日本軍慰安婦問題をめぐる男性中心的な日本政治の現状と歴史認識、そして安全保障観をケアの倫理の観点から批判的に考察するシンポジウムを開催した。グローバルな植民地主義の歴史と、現在まで継続する

紛争時の女性に対する暴力、さらにそうした暴力の記憶をどのように継承するか。パリ第8大学からは、Carol Mann 氏からのコメントを受け、日本における事例と日本におけるフェミニズム運動がもつ、現代的な可能性について討論の機会をもつことができた。[see <http://legs.cnrs.fr/spip.php?article206>]

FGSS センターにおける国際シンポジウム・ワークショップの開催

2016年3月14日、同志社大学において研究代表者である岡野八代と研究分担者であるアンヌ・ゴノンによって、各地域におけるケアの意味を比較する国際研究会を開催した。社会学者上野千鶴子、フランスからは、サンドラ・ロジェ、パトリシア・パベルマンを招聘した。

2017年3月7・8日、同志社大学において、研究分担者であるアンヌ・ゴノンによって、フランスおよび合衆国のケアの倫理研究者とともに、「ヴァルネラビリティ・身体、そして自己の諸様式」と題されたワークショップが二日間にわたり開催された。大学院生の報告を含め、生と身体の傷つきやすさについて学際的な議論を行った。

2018年10月20日、同志社大学において、研究代表者である岡野八代によって、フランスからキャロル・マン教授を招聘し、「戦争の記憶、ケアの倫理、そして民主主義」と題した国際ワークショップを開催した。学生たちの参加とともに、なぜ、戦争の記憶が民主主義を再活性化することに繋がるかについての活発な議論を行なった。成果は、2020年に同志社大学大学院グローバル・スタディーズ研究科紀要に掲載される予定である。

ケアの倫理についての国際的ネットワーキング作りへの参加

2017年11月24日、プラハにおいて開催された国際会議「ケアする民主主義 ケアを巡る政治理論における現代の諸問題」において「ケアの不足/参加の不足 日本における貧困女性の経験から」を共同報告した。この報告を契機に、「ケアワーク・グローバルサミット」、「ケアの倫理研究コンソーシアム」という二つの国際的なネットワークにつなげることができた。

2018年9月28日、合衆国ポートランド大学において開催された、上述の「ケアの倫理研究コンソーシアム」創設記念会議に、「脆弱な日本を通じて考える」という報告を行なった。

上記の研究報告は共に、欧州・合衆国いずれかの出版社から英語論文として発表される予定である。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計11件)

岡野八代「「平和の少女像」とは誰かーバトラーにおける倫理との対話のなかで」『現代思想』vol.47.no.3、査読無(2019年):206-216。

岡野八代「家族 政治からの解放は可能か?」『女性・戦争・人権』第16号、査読有(2018年):65-86。

岡野八代「フェミニズム理論と安全保障 24条「改正」論議を中心に」『ジェンダー法研究』第4巻、査読有(2017年):15-38。

菊池恵介「ポピュリズム台頭の元凶は白人貧困層か? フランス大統領選に見るポピュリズム論の誤謬」『Rondo』創刊号、査読有(2017年):36-44。

Yayo Okano, "Why has the Ethics of Care Become an Issue of Global Concern?" *International Journal of Japanese Sociology*, vol. 25, 査読有(2016):85-99. DOI, <https://onlinelibrary.wiley.com/doi/full/10.1111/ijjs.12048>

岡野八代「継続する第二波フェミニズム リベラリズムとの対抗へ」『同志社アメリカ研究』53号、査読有(2017年):103-124。

岡野八代「ケアの倫理と福祉社会学の架橋に向けて」『福祉社会学』12号、査読無(2015年):39-53。

岡野八代「ケアの倫理の社会的可能性」『ジェンダー法学会』12巻、査読無(2015年):12-23。

岡野八代「平等とフェミリーを求めて」『現代思想』43巻16号、査読無(2015年):60-74。

岡野八代「個人を育む家庭・家族の社会的意義 ケアの倫理からみた「自立」批判から」『日本家庭科教育学会誌』58巻3号、査読無(2016年):133-143。

Anne Gonon, "Le feminism a L'epreuvre d'une catastrophe. Mere, nature et care," *Les cahiers du genre*, No. 59 (2015): 2-19.

[学会発表](計16件)

岡野八代「ケアの倫理の源流へ 個からグローバルへ」第11回看護倫理学会・教育講演(招聘)@赤十字看護大学(東京)2018年5月26日。

岡野八代"Thinking through Precarious Japan" Care Ethics Research Consortium, Inaugural Conference @Portland State University, September 28th, 2018.

岡野八代「家族と政治 依存する人間像からの、新たな社会構想」、シンポジウム「ケアの倫理とフェミニズム 依存、生殖、家族」@大阪府立大学女性学研究センター(大阪) 2018年10月6日。

岡野八代「批判的安全保障論とケア フェミニズム理論は、「安全保障」を語れるのか?」日本政治学会@関西大学(大阪) 2018年10月13日。

岡野八代“How the Ethics of Care Constructs a Bridge between War Memory and Democracy” Workshop on the Ethics of Care, War Memory, and Democracy@ Doshisha University, October 20th, 2018.

菊池恵介「欧州・多文化主義の危機」政治思想学会(招聘講演)@甲南大学(兵庫) 2018年5月26日。

Yayo Okano and Maruyama Satomi, “The Lack of Care/ The Lack of Participation: From Experiences of Poor Women in Japan,” International Conference of Care Democracy @ Prague University, November, 24th, 2017.

Anne Gonon, “Quelle vie apres un accident nucleaire ?” Seminaire Maison franco-japonaise, 2017.

Anne Gonon, “What is a normal form of life? Fukushima disaster and Biopolitics” Symposium Disaster Risk Reduction, Maison franco-japonaise, 2017.

Keisuke Kikuchi, “Neoliberalisme et crise du modele japonais” @ Ecoles des Hautes Etudes en Sciences Sociales (EHESS), 2017.

菅野優香「AISを表象する - - メディア・アクティヴィズムと連帯の政治」@関西社会学会(招聘講演) 2016年5月26日。

Yuka Kanno, “Queer Girl’s Cinema as Counter-Climax Cinema,” Society for Cinema and Media Studies, @ Fiarmon Hotel Chicago (Chicago, US). March 23rd, 2017,

Yayo Okano, “Lutter contre les violence sexuelle en temps de guerre: Relfexions du probeme,” Colloque international de LEGS@CNRS, Ivry (Paris, France). des 'femmes de reconfort' de l’arumee imperiale du Japon

Anne Gonon, “What is a normal form of life? Fukushima disaster and Biopolitics,” Workshop “Forms of vulnerability, bodies and Self” @ Graduate School of Global Studies, Doshisha (Kyoto, Japan), March 7th, 2017.

Yayo Okano, “Toward a Caring Democracy: A Philosophical Analysis of the Process of Reconciliation of the Issue of 'Comfort Women' in Japan” 日本政治学会@千葉大学、2015年10月10日。

岡野八代「関係性アプローチと法理論 ジェンダー平等と暴力の観点から」、法社会学会、@首都大学東京(東京)(招聘講演) 2015年5月10日。

〔図書〕(計7件)

岡野八代「ケアの倫理から考える福祉権の可能性」尾形健(編)『福祉権保障の現代的展開——生存権のフロンティアへ』(日本評論社、2018年6月): 総264頁: 65- 87。

岡野八代「共生社会とシティズンシップ」上神貴佳・三浦まり(編)『日本政治の第一歩』(有斐閣、2018年7月): 総頁270頁: 227- 243。

Anne Gonon, “The Fukushima event, or the birth of a politicized generation,” in *Being young in super aging Japan*, Christian Galan, Patrick Heinrich (eds), (Lodon: Routlege, 2018), 246 pages.

岡野八代「道徳的責任とは何か 日韓合意と「平和の碑」をめぐる」牟田和恵編『架橋するフェミニズム』(電子書籍、松香堂書店): 総125頁: 97-108.
<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/68085/kakyouusurufeminizm-8.pdf>. DOI 10.18910/68085

岡野八代「教育学と政治学の出会い」浅井幸子(編)『教師の声を聴く 教職のジェンダー研究からフェミニズム教育学へ』(学文社、2016年): 総384頁。

菅野優香「人種化される欲望 「沖縄」をめぐる映画の想像力の一考察」川島・竹沢(編)『人種神話を解体する 「血」の政治学を超えて』(東京大学出版局、2016年): 総384頁。

岡野八代『戦争に抗する』(岩波書店、2015年) 総: 304頁。

〔産業財産権〕

○出願状況(計 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号：
出願年：
国内外の別：

○取得状況（計 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

<http://drc-fgss.com/>

6．研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：菅野優香

ローマ字氏名：Kanno Yuka

所属研究機関名：同志社大学大学院

部局名：グローバル・スタディーズ研究科

職名：准教授

研究者番号（8桁）：30623756

研究分担者氏名：アンヌ・ゴノン

ローマ字氏名：Anne Gonon

所属研究機関名：同志社大学大学院

部局名：グローバル・スタディーズ研究科

職名：教授

研究者番号（8桁）：50268116

研究分担者氏名：菊池恵介

ローマ字氏名：Keisuke Kikuchi

所属研究機関名：同志社大学大学院

部局名：グローバル・スタディーズ研究科

職名：准教授

研究者番号（8桁）：70536945

(2)研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。